

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red
Cross Kyushu International College of
Nursing

赤十字国際活動に対する看護師の意識調査：
九州における赤十字病院の調査から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2013-01-17 キーワード (Ja): 国際活動, 赤十字, 看護師, キャリア開発ラダー キーワード (En): international activity, the Red Cross Society, nursing profession, a career development ladder 作成者: 下山, 節子, 上村, 朋子, 高島, 和歌子, 江田, 柳子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15019/00000073

著作権は本学に帰属する。

報告

赤十字国際活動に対する看護師の意識調査 —九州における赤十字病院の調査から—

下山節子¹⁾ 上村朋子¹⁾ 高島和歌子²⁾ 江田柳子³⁾

本研究は、国際活動に参加する赤十字看護師に対する人材育成プログラム策定の基礎資料とするために、九州の赤十字医療施設で勤務する看護師に対し、赤十字国際活動に対する意識に関する実態調査である。結果、国際活動に対する看護師の意識の高さが明らかになった。特に、看護経験年数の少ない20代前半の看護師の存在や、30歳前後の中堅看護師が語学力を身につけ国際活動に対し高い参加意識があることも明らかになった。また、看護大学出身の看護師の意識の高さにも注目する点があった。この調査から国際活動に対する日本赤十字九州国際看護大学と、熊本赤十字病院および福岡赤十字病院の両施設の救援活動および卒後人材育成を連携した、「大学教育から就業後の継続教育としての国際救援活動キャリア開発ラダー」構築、および九州版「国際活動に携わる赤十字看護師のキャリア開発ラダー」活用に関して若干の示唆を得たので報告する。

キーワード：国際活動、赤十字、看護師、キャリア開発ラダー

1 はじめに

日本赤十字社看護部は2004年より赤十字医療施設のキャリア開発ラダー策定に取り組み、2007年には「看護師の実践能力の向上に関する検討会」報告書を出している¹⁾。当初、その策定過程において、国際活動に関するキャリア開発の視点はまだ捉えられていなかった。

下山が2006(平成18)年度に日本赤十字学園「赤十字看護・介護に関する研究」助成をうけ、「国際活動にかかわる赤十字看護師の九州版キャリア開発ラダーの構築」に取り組んだ。これは、国際医療救援拠点指定病院である熊本赤十字病院および本学の主たる看護学実習施設である福岡赤十字病院と連携し、基礎教育から継続教育に至るまでの国際活動における赤十字看護師キャリア開発ラダーの構築である。

この、国際活動における赤十字看護師キャリア開発ラダー構築の過程において、赤十字看護師の海外派遣要員の人材不足の問題が課題のひとつに挙げられた。

1992-2001年の日本赤十字社の海外救援派遣の現状²⁾をみると、派遣数は、41ヶ国、延べ555名(医師、看護師、助産師、薬剤師、検査技師、事務・管理要員)で、年平均は55.5名である。2002(平成14)年には、21ヶ国・地域に延べ56名、2003(平成15)年には19ヶ国・地域延べ49名で、概ね、それ以前と同様の趨勢にあった。

しかしながら、インド洋津波災害が発生した2004(平成16)年には、支援総数40ヶ国以上中、11ヶ国・地域に108名派遣という、それまでの年平均の倍近い派遣がなされている。これらの派遣数に占める看護師の割合は平均約20%であった。

2006(平成18)年9月現在の本社国際部調査によると、海外派遣看護師登録要員は114名で、赤十字医療施設に勤務する看護師約3万人の0.3%である³⁾。しかし、赤十字国際活動に対する看護師の意識については調査されておらず、その実態は把握できていない。

そこで、今回、九州の赤十字病院の看護師を対象に赤十字国際活動に対する関心度や国際活動の参加希望、研修ニーズの調査を行い、その結果として、国際活動に携わる看護師の人材育成の方向性について若干の示唆を得たので報告する。

1) 日本赤十字九州国際看護大学
2) 熊本赤十字病院看護部
3) 福岡赤十字病院看護部

II 研究目的

九州の赤十字医療施設で勤務する看護師の赤十字国際活動に対する関心度合いや希望者の実態を明らかにし、赤十字国際活動における人材育成プログラムの基礎資料とする。

III 研究方法

1. 調査方法

質問紙調査法 郵送留め置き

2. 調査期間

平成19年7月20日～8月3日

3. 調査内容

看護師の属性・教育背景（年齢・看護経験年数・勤務経験・現在の勤務場所、出身校）、国際活動に対する関心度、国際活動の参加希望、自由記載（語学資格、国際関連研修参加、研修ニーズ、要望など）

4. 調査対象

九州の赤十字病院（今津赤十字病院・大分赤十字病院・沖縄赤十字病院・鹿児島赤十字病院・嘉麻赤十字病院・唐津赤十字病院・熊本赤十字病院・日本赤十字長崎原爆病院・日本赤十字長崎原爆諫早病院・福岡赤十字病院）に勤務する看護師2243名に配布。1855枚回収（回収率84.03%）し有効回答数1847枚（99.5%）であった。10施設の回収率は56.9%～97.4%と差があった。

5. 分析方法

看護師の属性、教育背景と国際活動に対する希望との関係について記述統計、t検定を行った。グループ間の比較で、その差が10%以上の場合に「多い」を用いる。

IV 研究の倫理的配慮

各施設に一括して調査用紙を郵送したため、個人の自由意思で研究に参加できるように回収箱の設置場所や回収方法が強制的にならないように施設に協力を依頼した。返信は個人用の封筒を準備し回収袋

で回収し、看護部で一括郵送を依頼した。また、調査に同意した対象のみが質問紙に回答するように、研究参加は自由であること、無記名とし個人の特定はなされないこと、データは統計処理することを紙面で説明した。なお、研究にあたっては日本赤十字九州国際看護大学研究倫理審査委員会の審査を受け承認を得た。

V 調査結果

1. 対象者の特徴

回答を得た1847名の平均年齢は33.50±11.13歳、平均経験年数は10.68±9.04年であった。

表1は基礎教育別の出身校の割合を示す。最も多かったのは赤十字以外の出身者で専門学校・短大の1067名（57.8%）であった。基礎教育を赤十字で受けたのは405名（21.9%）で、看護大学出身は300名（16.2%）であった。

表1 基礎教育別出身校

基礎教育出身校		人数	%
赤十字出身	専門学校・短大	294	15.9
	看護大学	111	6.0
赤十字以外の出身	専門学校・短大	1067	57.8
	看護大学	189	10.2
	その他	186	10.1
総数		1847	100

2. 国際活動に対する関心度

図1に調査対象者全体の国際活動に対する関心度を示す。「関心がある」と答えた看護師は365名（19.8%）、「少しはある」が1000名（54.1%）で最も多く、「関心がない」のは482名（26.1%）であった。

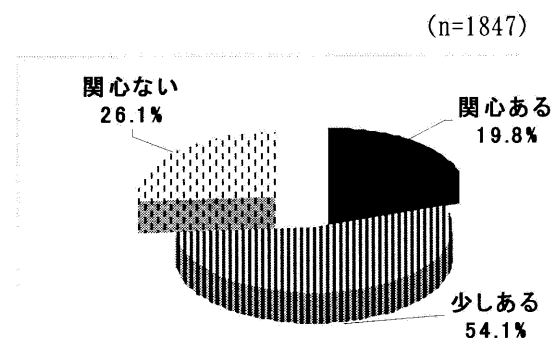


図1 国際活動に対する関心度

図 2 に施設別の国際活動に対する関心度を示す。施設には国際医療救援拠点指定病院が 1 施設含まれているが、いずれの施設も関心度はほとんど同等の割合を示した。

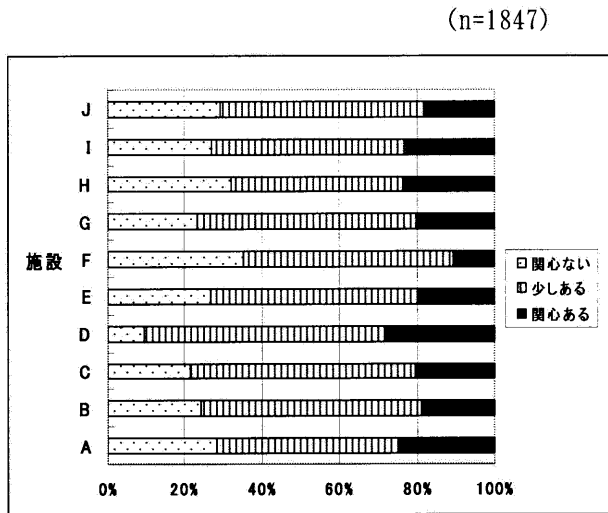


図 2 国際活動に対する施設別関心度

3. 国際活動への参加意識

国際活動に対する参加希望の割合を図 2 に示す。参加を希望する看護師は 255 名 (13.8%)、よくわからないが 840 名 (45.5%)、希望しないが 752 名 (40.7%) であった。

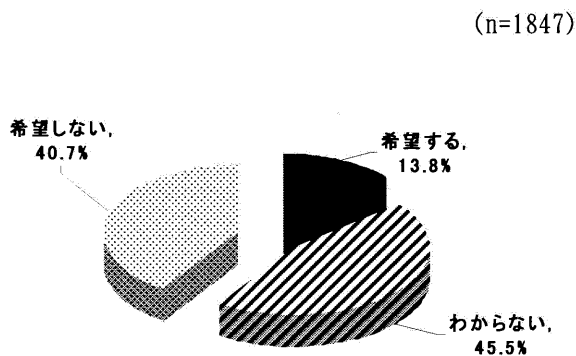


図 3 国際活動に対する参加意識

国際活動参加意識と年齢、経験年数を表 2 に示す。「希望する」と回答した看護師の平均年齢は 30.10 歳で「わからない」は 31.62 歳、「希望しない」は最も年齢が高く 36.7 歳であった。「希望する」「わからない」「希望しない」それぞれの年齢、経験年数間には有意差が認められた。

表 2 国際活動参加意識別にみた年齢と経験年数

(n=1847)

国際活動の参加意識	年齢±標準偏差	経験年数±標準偏差
希望する 255 名	30.10±8.08*	7.04±7.45*
わからない 840 名	31.62±8.96*	8.96±8.26*
希望しない 752 名	36.7±10.06*	13.70±9.43*

*p<0.1

4. 国際活動を希望する 255 名の実態

1) 年齢分布

国際活動を希望する看護師の平均年齢は、30.10 歳であるが、表 3 に示す看護師の年齢分布をみると、看護師として経験を積み中堅といわれる 25 歳から 29 歳が 83 名 (約 33%) を占めた。また、20 歳代が 154 名と全体の約 60% を占め最も多かったが、30 歳以降は各年代層に希望者が分散していた。

表 3 国際活動希望者の年齢分布

(n=1847)

年齢	人数 (%)
24 以下	71 (27.8)
25-29	83 (32.6)
30-34	43 (16.9)
35-39	19 (7.5)
40-44	20 (7.8)
45-49	10 (3.9)
50 代	9 (3.5)
総数	255 (100)

2) 経験年数

国際活動を希望する看護師の平均経験年数は、約 7 年であるが、その看護師の経験年齢分布を表 4 に示す。就職したばかりの経験年数 6 ヶ月未満が 46 名で全体の 18.0% であった。2 年目までの経験を併せると 84 名で全体の 33.9% で最も多く、9 年目までを併せると全体の約 70% で 10 年以上の経験者が約 30% であった。

表4 国際活動希望者の経験年数

(n=1847)

経験年数	人数 (%)
6ヶ月未満	46 (18.0)
7ヶ月-2年	38 (14.9)
3-4年	46 (18.1)
5-9年	47 (18.4)
10-14年	35 (13.7)
15-19年	18 (7.1)
20年以上	25 (9.8)
総数	255 (100)

3) 施設別

国際活動を希望する看護師が所属する赤十字施設(A~J)の内訳を表5に示す。

国際活動を希望する看護師255名のうち国際医療救急拠点病院が57名で全体の22.4%を占めた。しかしながら、他のほとんどの赤十字病院においても多くの看護師が国際活動の参加を希望していることが明らかになった。

表5 10施設(A~J)別国際活動希望者数

(n=1847)

施設	A	B	C	D	E
人数	11	30	36	21	2
(%)	(4.3)	(11.8)	(14.1)	(8.2)	(0.8)
施設	F	G	H	I	J
人数	19	57	33	10	36
(%)	(7.5)	(22.4)	(12.9)	(3.9)	(14.1)
総数	255				
(%)	(100)				

4) 基礎教育出身校

国際活動の希望者を出身校別で見ると、赤十字以外の看護専門学校・短大が最も多く133名であった。これは参加希望者255名の52.1%、約半数にあたる。

しかしながら、国際活動への参加希望を出身校別の割合から見ると、表6に示すように、赤十字看護大学出身の看護師総数111名のうちの28名(約25%)が希望していた。同様に赤十字以外の看護大学出身の看護師の希望の割合も約18%と看護大学出身以外と比較して多い傾向にあった。

表6 出身校別にみた国際活動への参加意識

(n=1847)

基礎教育別 出身校		出身校 別人数	希望者数 (出身校別人数に 占める比率%)
赤 十 字	専門学校・短大	294	39 (13.3)
	看護大学	111	28 (25.2)
赤 十 字 以 外	専門学校・短大	1067	133 (12.5)
	看護大学	189	34 (18.0)
その他		186	25 (13.3)
総数		1847	255

5) 語学力

本調査では、語学力については自己申請で調査した。語学力の段階は表7で示すように5段階に分類した。数名仏語の資格保持者がいたがほとんど英語能力の資格取得であった。語学資格をもっていない、あるいは取っていない看護師が155名と大半を占めた。

英検2級以上の高い英語レベルの資格を持つものは、38名で総数255名の14.9%であった。

表7 国際活動参加希望者の語学力

(n=1847)

レベル	人数 (%)
TOEIC700以上	13 (5.1)
英検2級レベル	25 (9.8)
英検準2級レベル	39 (15.3)
英検3・4級レベル	25 (9.8)
検定資格なし	153 (60.0)
総数	255 (100)

6) 年代別語学力

表8は語学力を年代別にみた。20歳代前半は英検準2級以上の語学力が比較的高かった。英検2級以上の高い英語レベルの資格を持つものは、実数では、25-29歳の13名が最も多かったが、総数での比較では、30-34歳の比率が最も高かった。

施設別の語学力では、国際医療救急拠点病院である熊本赤十字病院は英検準2級以上のレベルを取得

している看護師が多く、他の各施設は英検準 2 級レベル以上の看護師の占める割合が少なかった。

表 8 国際活動参加希望者の年代別の語学力

(n=1847)

	TOEIC700 以上	英 検 2 級	英検 準 2 級	英検 3, 4 級	資格 なし	総 数
24 以下	0	8	22	11	30	71
25-29	4	9	15	4	51	83
30-34	6	3	1	4	29	43
35-39	1	2	1	1	14	19
40-44	2	2	0	2	14	20
45-49	0	0	0	3	7	10
50 代	0	1	0	0	8	9
総数	13	25	39	25	155	255

VI 考察

1. 国際活動に対する赤十字看護師の認識

昨今の国内外の社会情勢や健康危機問題は、赤十字病院に勤務する看護師の国際活動に対する認識に大きな影響を与えていると考えられる。今回の調査結果(図 1)をみても、73.9%の看護師が国際活動に何らかの関心をもっていることが明らかとなった。

九州では、熊本赤十字病院が国際医療救援拠点指定病院として機能しその役割を担っている。しかし施設別にみた国際活動の関心度(図 2)に大きな偏りはなくいずれの施設も国際活動に高い関心を示した。

一方、国際活動の参加意識をみると(図 3)、はっきりと参加を意思表示したのは 255 名(13.8%)であった。国際活動の希望(表 1)については「わからない」と答えた看護師は、840 名(45.5%)で現実的な問題や課題があると推察できる。将来の可能性も考えると、このような「わからない」と回答した看護師も含めて国際活動の参加を希望する看護師を掘り起こし、興味関心が途絶えることのないような研修企画が望まれる。

2. 国際活動にかかわる赤十字看護師のキャリア開発のあり方

1) 国際活動を希望する看護師の特性

国際活動の参加を希望する 255 名の年齢分布(表

3)、経験年数分布(表 4)をみると、24 歳以下の看護師 71 名が将来、国際活動の参加を見据えていることが明らかとなった。また、就職したばかりの 6 ヶ月未満の看護師が国際活動におおきな目標をもっていることも明らかとなった。

この時期は、スーパーのキャリア・モデルの段階でいえば探索・試行期にあたる⁴⁾。このような個人のキャリア開発を支援するには、メンターの考え方⁵⁾を導入し、国際活動への関心や参加意欲を継続できるようなキャリア支援も必要と考える。

それと共に 25-29 歳の看護師 83 名が、看護師としての専門性を追求し選択する時期において国際活動への参加を希望していることも多いに注目したい。

また、30 歳以上の年齢の看護師たちは、国際分野における看護師としての自己の位置を見つけ出す時期でもあり、国際活動にかかわる看護師を発掘する際の貴重な情報といえる。今後は国際活動におけるキャリア開発プログラムを構築し人材育成をはかることが課題と考える。

次に、国際活動の参加を希望する看護師を出身校別にみると(表 6)、赤十字以外の専門学校・短大卒業の看護師が 133 名と最も多かった。これは、赤十字以外の専門学校・短大卒業の看護師総数が 1067 名で全体数 1847 名の約 80%弱が赤十字以外の出身という背景が影響していると考えられる。

一方、赤十字以外の専門学校・短大卒業者の総数に対する国際活動希望者の占める比率は 12.5%と低い値を示しており、総数からすると希望者の割合は比較的少ないことも明らかとなった。しかし、実数として高い数字がでていることに注目し赤十字以外の専門学校・短大卒業者に対する独自の教育プログラムを取り入れる必要がある。

さらに、看護大学出身の看護師の国際活動の希望者は 28 名であった。しかし、その 28 名を出身校別に総数の比率で見ると赤十字の看護大学出身者の約 25%が国際活動への参加を希望していることが明らかとなった。しかも、その比率でみるならば、占める割合が次に多かったのは、赤十字以外の看護大学出身者であった。

加えて、この 28 名の中で日本赤十字九州国際看護大学出身の学生が 23 名含まれており、日本赤十字九州国際看護大学にとって開学以来国際を柱のひとつとし、また唯一国際を標榜している看護大学としての教育成果を出しているといえる。

これらのことから、赤十字施設に就職した看護系大学出身の看護師の4人に一人は、将来、国際看護分野の専門性を探求することを念頭においているのではないかと大いに期待できるし、また、看護大学卒がキャリアを形成していけるような仕組みを準備する必要がある。田代⁶⁾は、学部から修士への一環開発として国際看護学コース展開を述べている。しかし、赤十字国際活動におけるキャリア開発ラダーの構築にあたっては、学部から臨床へそして大学院教育へと連動したキャリア開発プログラムが必要と考える。

2) 研修企画の課題

国際活動に参加できるレベルとしては、BTC (国際救援・開発協力要員基礎研修会: Basic Training Course) 研修受講をひとつの条件として挙げることが本社主催の「国際救援・開発事業にかかわる人材育成検討会」で検討されている。なお、BTC 研修受講要件としての語学力は、TOEIC700点相当のレベルが想定されている。

表7は、国際活動の参加を希望する看護師の語学力を示した。便宜上、レベルを5段階に分けその実態を明らかにしたが、英語検定などの有資格者は40%であった。国際活動の参加を希望はしていても必要条件である語学力に対し約60%の看護師から十分な回答が得られなかった。資格をもっていないだけなのかその語学力の実体は把握できていないが、少なくとも語学力が不足していることは推察できる。

年齢別に語学力みると(表8)、20歳代の看護師は、比較的積極的に英語検定資格を取得しており、計画的に準備に取り組んでいるのではないかと推察される。

以上のことから、語学資格の取得に対する啓発や語学研修への取り組みも今後の大きな課題となる。

また、国際活動に関心をもち、そして国際活動に参加意欲のある看護師の自由記載の意見、要望をまとめた。総件数として200件(複数回答)あった。

自己研鑽の内容としては、英語レベルの高い看護師ほど積極的な取り組みが多い傾向にあった。その内容は、かなり主体的に国内外の社会情勢について英語で情報を取るなど、種々の研修参加があった。国際活動に参加したことが契機となり益々自己研鑽に励む傾向がみられた。また、関心をもつ看護師に対する勉強会の企画・運営に取り組んでいる看護師もいた。

研修企画をする上で参考になる多くの意見があった。この中で、研修内容として要望の多かった、公衆衛生、熱帯医学、PHC、マネジメント(管理)、セキュリティ、予算の立て方、モニタリング方法、評価方法、Code of Conduct(人道援助倫理)、スフィアプロジェクト、HIV/AIDS、現地(途上国)研修、心のケア、ストレスマネジメント、戦傷外科や外傷に関する研修については、本社主催の「国際救援・開発事業にかかわる人材育成検討会」において企画した研修項目に全て含まれている。

一日も早く、国際活動に携わる看護師のキャリア開発ラダーを完成させ5つの国際医療救援拠点指定病院だけでなく、全国の施設に配布し人材育成に役立て、国際活動の参加を希望している看護師の要望に応えていかなければならない。

海外救援派遣システムに関しても、いくつかの課題が提示された。施設でどのように情報を周知させるのか、学習の機会をどのように公平に与えるか、今後の「国際活動にかかわる赤十字看護師のキャリア開発ラダーの導入」にあたっては、十分考慮しなければならない。

3) 赤十字医療施設と日本赤十字九州国際看護大学の連携

国際活動への参加を希望している255名(13.8%)を施設別にみると(表5)、最も希望が多かったのは、国際医療救援拠点指定病院である熊本赤十字病院で57名であった。当然の結果といえるが、しかしながら九州の各赤十字病院いずれにおいても国際活動への参加を希望している看護師の存在が明らかとなった。

このことは、国際活動における研修システムをもっている熊本赤十字病院と他の赤十字病院といかに連携していくか、また日本赤十字九州国際看護大学がここにどのように関与するかが重要な鍵となることを示している。

国際活動に関連する研修企画については、熊本赤十字病院、日本赤十字九州国際看護大学そして福岡赤十字病院が連携しネットワークを創り運営していくことができるのではないかと考える。

VII 結論

1. 九州の赤十字病院に勤務する看護師1847名の赤十字国際活動に対する意識調査を実施した。その結果、いずれの施設の看護師も国際活動に対する関心

は高く、また、参加意識は若い看護師ほど高かった。国際活動に関する関心や参加意欲を継続するためのメンターによるキャリア支援の必要性が示唆された。

2. 国際活動の参加を希望している看護師は 255 名で全体の 13.8%であったが、そのうち 29 歳未満が約 60%を占めた。貴重な人材を育成・活用するためのキャリア開発プログラム構築が重要な課題である。

3. 国際活動を希望する看護師の語学力は、25-34 歳の看護師が最も高かったが、英検 2 級以上の高い英語レベルの資格を持つものは、総数の 14.9%であった。語学研修への取り組みも今後の大きな課題となる。

4. 国際活動の希望を出身校別実数で見ると、赤十字以外の希望者が最も多く、これらの特徴を活かした教育プログラムを企画する必要がある。

また、看護大学出身者には国際活動希望の比率が高く、基礎教育から継続教育、卒後教育へと連動したキャリア開発プログラムの必要性が示唆された。

5. 国際活動にかかわる赤十字看護師の人材育成においては、国際医療救援拠点指定病院である熊本赤十字病院、日本赤十字九州国際看護大学そして日本赤十字九州国際看護大学の主たる看護学実習病院である福岡赤十字病院が連携して、九州全体を巻き込んで取り組むことの必要性が明らかとなった。

その取り組みの第一歩としては、九州版の国際活動にかかわる看護師のキャリア開発ラダーの導入と、国際関連の研修企画をはじめとする情報共有などネットワークづくりといえる。

謝辞

今回の調査にあたり、ご協力いただきました今津赤十字病院・大分赤十字病院・沖縄赤十字病院・鹿児島赤十字病院・嘉麻赤十字病院・唐津赤十字病院・熊本赤十字病院・日本赤十字長崎原爆病院・日本赤十字長崎原爆諫早病院・福岡赤十字病院の看護部長、看護師の皆様に深謝申し上げます。

受付	2008. 3. 31
採用	2008. 5. 30

文献

- 1) 日本赤十字社事業局看護部：「看護師の実践能力の向上に関する検討会」報告書 赤十字医療施設のキャリア開発ラダー。東京、日本赤十字社事業局看護部、2007。
- 2) <http://www.jrc.or.jp/active/kokusai/worker/list.html> 日本赤十字社 HP
- 3) 日本赤十字社事業局看護部：平成 18 年度日本赤十字社学園本部主催「第 2 回国際救援・開発協力事業に携わる人材育成検討委員会」資料 No. 2. 東京、日本赤十字社国際部、2006。
- 4) 勝原裕美子：論点：キャリアとは何か。井部俊子、中西睦子監修：看護管理学習テキスト④看護における人材資源活用論、東京、日本看護協会出版会、p7、2004。
- 5) 小野公一：キャリア発達におけるメンターの役割、pp22-25、東京、白桃書房、2003。
- 6) 田代順子、長松康子：修士課程国際看護学開講の経緯と学部一環のコース展開。聖路加看護大学紀要、33：111-115、2007。

The Research on the Consciousness of nurses working at the Red Cross Hospitals in Kyushu for the international activities

Setsuko SHIMOYAMA, R.N.,M.A.¹⁾ Tomoko UEMURA, R.N.,M.A.¹⁾
Wakako TAKASHIMA, R.N.²⁾ Ryuko EDA, R.N.³⁾

This research is on the actual conditions of consciousness of nurses working at the Red Cross Hospitals in Kyushu for the Red Cross international activities. The purpose is to get the basic data of personnel development program for the Red Cross nurses who will be engaged in the international activities. The results of the research showed that the nurses were highly motivated in international activities. Especially the nurses in twenties and early thirties with a little experience had a high motivation and were learning foreign languages. It was remarkable that the nurses graduated from college had a high motivation to international activities. This research also gave us some suggestions for development of “international rescue operation career development ladder as a continuous education of undergraduates and graduates” and application of “the Kyushu version of career development ladder for Red Cross nurses engaged in international activities”, through undergraduate education and rescue activities in cooperation with The Japanese Red Cross Kyusyu International College of Nursing, Kumamoto Red Cross Hospital, and Fukuoka Red Cross Hospital.

**Key words: international activity, the Red Cross Society, nursing profession,
a career development ladder**

-
- 1) The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing
 - 2) Kumamoto Red Cross Hospital
 - 3) Fukuoka Red Cross Hospital